

背景

長久手町をいかにブランド化し、町民が“わが街”を誇りに思い、町外の人々が“訪れてみたい街”にするか、は長久手町にとって大きなテーマである。

前者については、長久手町の持つ質の高い芸術・文化環境を生かして、地域ぐるみで日常的に文化や芸術をいかに楽しんで行うかが問われている。すなわち、長久手町には名都美術館、文化の家やトヨタ博物館など、全国的に誇りうる質の高い芸術・文化施設がある。また、愛知県立芸術大学といった人材育成（教育）の場もあり、このような芸術・文化に関連した施設を多くの町民に周知して、より有効に活用していくことが重要である。町全体がキャンパスとなって芸術・文化を育んでいくことのできるまちを目指したい。

後者は人々を呼び込むこと、すなわちどんな観光を展開するかが問われている。現状では、戦国時代から現在まで継承されている棒の手や種子島の鉄砲を使ったお祭り「警固祭り」がある程度で、世界への発信に足るイベントがない。世界中から2,200万人もの人を集めた愛・地球博が長久手で開催されたため、その成果を活かしつつ、国内外からたくさんの人々に長久手町へ来てもらいたい。この二つの視点はたがいに連動しているので、一体的に取り組むことが効果的な成果を出せるであろう。

提案

上記の背景をもとに、提案の枠組みを整理すると次ページの図のようになる。

これは長久手の資源（人的にも空間的にも）を掘り起こし、再編するが、そのままでは静的な資源であるので、そこに人々に関わる「仕掛け」を加えて、「静」から「動」へ転換することで、情報を発信し、それが集客を増やすという良循環になっていることである。

これを

長久手“げいじゅつ”キャンパス
～犬も歩けば“げいじゅつ”にあたる～

と呼ぶことにする。

なお芸術を“げいじゅつ”と平仮名にしたのは、赤ん坊からお年寄りまでの参加を期待しての命名である。同時に、高尚なアートや音楽等の分野に限定せず、スポーツやオタク的趣味や技や芸までを含む広い概念として捉えている。飛び抜けた技や芸を持つ人は独自のネットワークを持ち、世

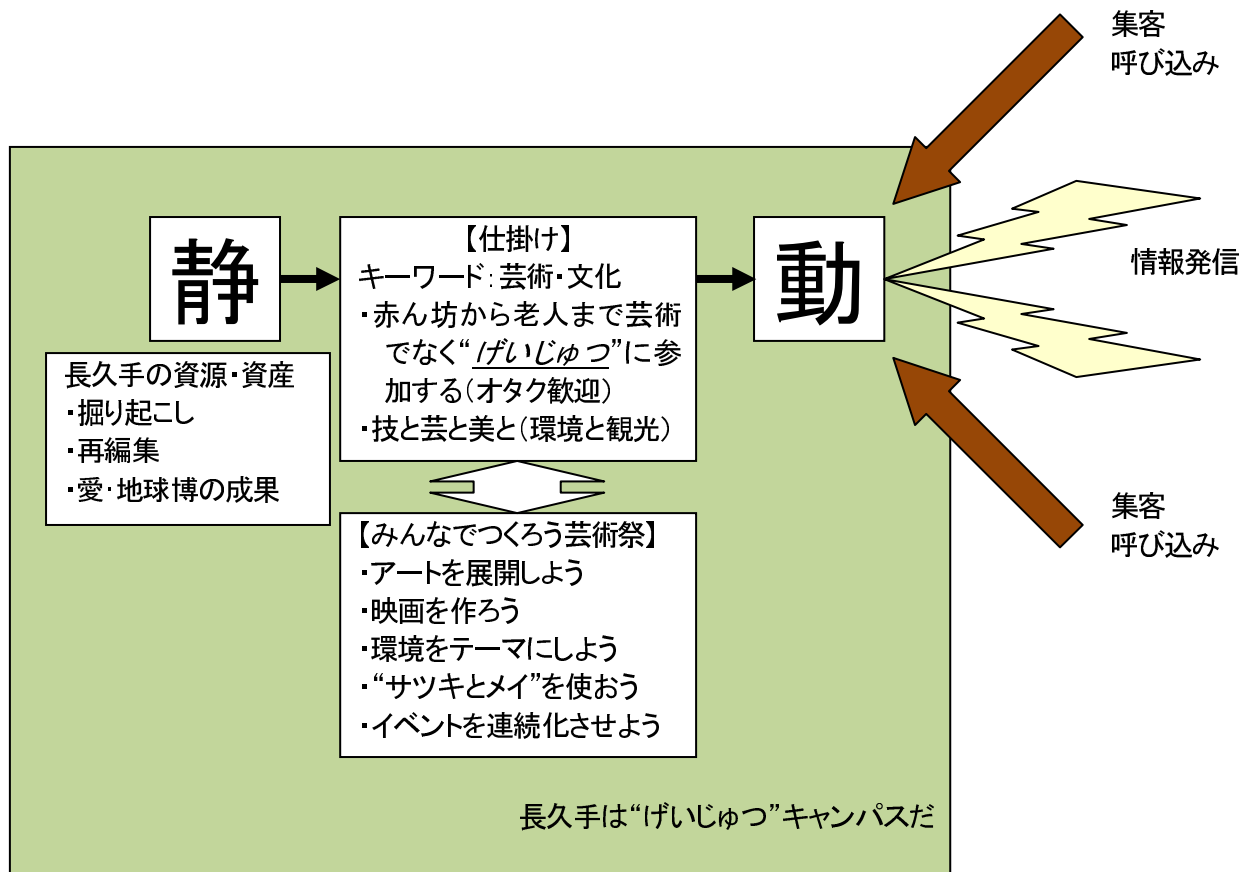
界に情報発信できるポテンシャルを持つ。また、どこに行っても“げいじゅつ”に接することができるほど身近な存在であることを願って、「犬もあるけば“げいじゅつ”にあたる」というサブタイトルをつけている。

“キャンパス”は学ぶ場、表現する場として位置づけ、ネーミングしている。

そこで、“げいじゅつ”をテーマに、「静」から「動」へ変化させることによって、町民の“げいじゅつ”ニーズを満たし、創造性を高めるとともに、外から多くの人々を呼び寄せるイベントを立ち上げるプログラムは次の3つのステップを踏む。

1. 長久手の資源・資産の掘り起こし
2. 「静」から「動」へ仕掛ける
3. 情報を発信し集客する

以下それぞれについて要素提案を行う。



1 長久手の資源・資産の掘り起こし

■ 歴史資産や文化資源

- ・既存の歴史資産としては「オマント」や「警固祭り」がある。新たな資産としても文化の家で行われているオペラコンクールによって、世界へ飛躍できる芸術家を輩出しようとしている。
- ・また、芸術大学をはじめ、様々な研究機関がある。トヨタ博物館や名都美術館といったミュージアムもある。これらのものを上手く連携させながら、大きな芸術祭を開催する。

■ 万博成果の継承

- ・モリコロパークには愛・地球博のシンボルの一つである「サツキとメイの家」があり、昭和30年頃の生活環境が再現され、現代の課題である省エネ・エコの生活を体現している。サツキとメイにちなみ宮崎駿氏を呼べたらと思う。日本のアニメは広く世界に知られており、非常に評判がよいので、アニメと環境を結び付けた新しい芸術祭を起こす。ちなみに「サツキ」は長久手町の花でもあり、その点からも町をPRできる。
- ・万博の継承資産である環境活動を発展させるとともに、技術面でも太陽電池や電池、水素ガスなどを使った新たな交通手段「ECOバス」を長久手町のシンボルとして導入する。町民の足として「Nーバス」が走っているが、それを「ECOバス」化することで、「トトロの森」のアニメに出てくる「NーECOバス」(ネコバス)にちなむことができる。

■ 名人・オタクを発掘する

- ・電車オタクやペン回しが得意な人など、ある部分に長けた名人・オタクを発掘し、彼らを巻き込んで、柔らかな芸術文化を育てていく。

2 静から動へ仕掛ける

町内に埋もれて蓄積している「遺産」を有効に活用していく「資産」として位置づけ、「長久手ブランディング」を実現していくため、新しい芸術祭を開催することを提案する。そのため、以下のように基本テーマを設定し、ユニークな発想で様々な仕掛けをすることで、世界からも人が呼べる長久手を目指す。

■ 長久手町と愛知県立芸術大学とのコラボレーション

- ・長久手町と愛知県立芸術大学（以下、「県芸大」と呼ぶ）とが連携し協同することにより、芸術文化が核となるまちづくりを目指す。
- ・県芸大とコラボレーションすることで、町内外の人々が芸術文化に触れられる機会を設け、芸術文化のまちというイメージを作っていきたい。県芸大としては、新しい取り組みを行うことにより全国の芸術大学の中でのレベルアップにつなげていくことが可能となるのではないか。

■ 地域に開く

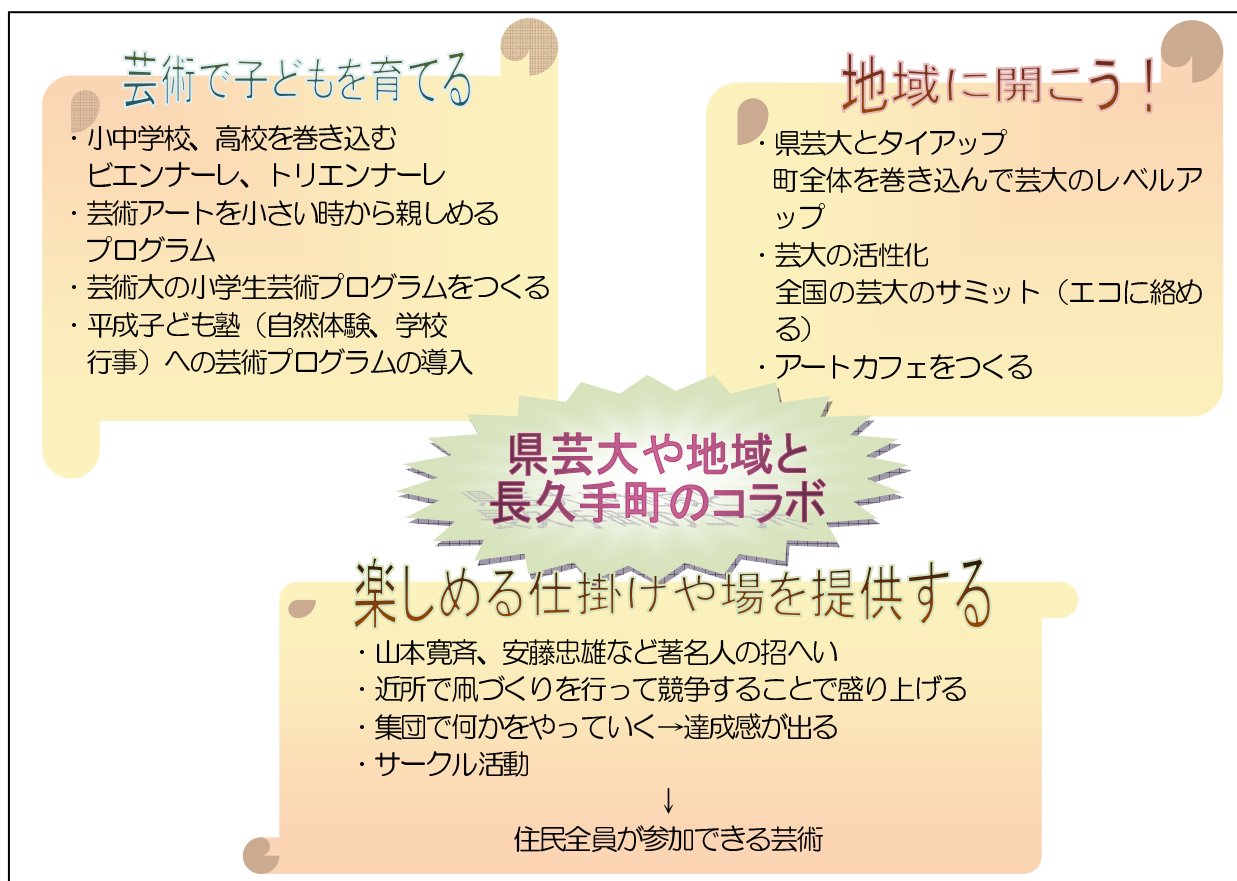
- ・芸大祭など県芸大で行われる活動の情報を町民に周知させるため、長久手町に広報の窓口を設ける。長久手町が情報発信し、発表の場を提供することで、町民がより多くの芸術に触れる機会をつくる。
- ・町内の喫茶店等をイメージしながら、芸術文化をより身近なものにするため、県芸大の先生やアーティストと町民がふれあう場として「アートカフェ」を運営する。これは科学離れが進む中で、住民にとって科学をより身近なものにするため、専門家が分かりやすく解説する「サイエンスカフェ」があるが、この文化芸術版が「アートカフェ」である。

■ 子どもを育てる

- ・芸術文化の高いまちにするため、幼いころから芸術文化に親しめる仕組みを作っていきたい。例えば、県芸大に小学生芸術プログラムを作成し、運営してもらう。
- ・幼児や小中学生、高校生に少しでもアートや音楽を知ってもらうため、学校で芸術観賞や音楽鑑賞などの行事を積極的に取り入れる。芸術文化を実際に体験できるよう、県芸大の協力を得て「平成子ども塾」の芸術版を運営する。

■ 楽しめる仕掛けと場を提供する

- ・著名人を招いて大規模な芸術祭を開催する、あるいは地区ごとにグループを組んで競い合うイベントを開催するなど、町民全員が参加できる仕組みを目指す。
- ・既存の施設を利用して、サークル活動など集団で楽しめる場を提供する。

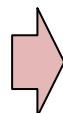


3 情報を発信し集客する

■ アニメと環境を結び付けた新たな芸術祭—ながくて環境げいじゅつ祭（仮称）—

- ・提案1の資源・資産を活用して下記の要素を取り込んだ芸術祭を情報発信手段とする。

◇サツキ（町の花）とメイ（アニメと生活環境見本）
◇環境（愛・地球博の継承資産）
◇芸術祭（長久手の創造力）
◇イベントリレー（定着）



ながくて環境げいじゅつ祭

■ 世界へ発信する

- ・芸術文化の啓発と環境問題の取り組みで世界へ発信させる。（ながくて環境げいじゅつ祭）
- ・国際オペラ声楽コンクールを定着させる。
- ・世界が平和でないと芸術祭の開催は実現できない。芸術祭の開催は平和な世の中が前提となる。この趣旨からローマ法王と宮崎駿氏を呼んで対談を開催するなど、話題性を高めつつ世界中から芸術祭に人を呼び、住んで楽しいまちづくりを目指す。
- ・1年を通したテーマを設定し、リレー的に毎月、毎週、毎日と様々なイベントを展開し、芸術祭を定着化させる。このようにして、長久手町の価値（バリュー）の向上を目指す。

期待される効果

- ・大人から子供まで町民一人ひとりが“げいじゅつ”（高尚なアートや音楽からスポーツ、オタク的趣味や技や芸までを含む広い概念／前掲）に親しむことによって、創造性を育み、また“げいじゅつ”を契機として、町民同士の交流、あるいは町外との交流が促進し、新しい活動（アソシエーション*）が生まれてくる。
- ・“げいじゅつ”と愛・地球博の理念継承を行う“環境”を組み合わせることによって、今までにない新しいイベント（テーマ性や参加性）を創出できる。
- ・このイベントを通じて、環境等について、長久手町ばかりか世界に視点が行き、また平和があって“げいじゅつ”が楽しめることを町民が自覚する。
- ・町民ぐるみで「ながくて環境げいじゅつ祭」を取り込むことによって、世界に情報発信し、多くの人々を長久手に呼び込むことができる。
- ・なお、“げいじゅつ”をテーマに継続して取り組んでいくためには役場内に担当課（例えばげいじゅつ課）を設置することが望まれる。町レベルでこのようなカを設置する自治体はないであろうから、それだけでも十分情報発信が可能となる。

*アソシエーションは同一テーマのもとに活動する組織をイメージしている。それに対しコミュニティは同一地域をもとに活動する組織となる。